



謙澄と近人々

題字
棚田看山

その1

昨年、末松謙澄の没後百年にあたって、幅広い分野での活躍をお伝えしました。その続編を連載し、謙澄の人生に大きな影響を与えた人々を紹介いたします。

末松謙澄は幼少期、上稗田村に村上山が開いた私塾『水哉園』で学んだ。仏山と謙澄の師弟愛がよく表されているのは、「亡師仏山先生を祭る文」であろう。明治12年9月、英国留学中の謙澄に仏山先生の逝去の知らせが入る。万里の波濤を越えた異国にいる謙澄は、仏山の好きだった日本酒のかわりに葡萄酒をガラスのコップに注ぎ日本の方に向かって捧げ、先生の冥福を祈るのみであった。「亡師仏山先生を祭る文」は種々の本にも紹介され、名文として高く評価されている。

謙澄は慶応元年10歳の時、水哉園に入門したが、翌年の慶応2年8月、長州藩と小倉藩との戦争の際に百姓一揆がおこり、大庄屋の末松家は全

村上仏山

～謙澄との師弟愛～

水哉園で、謙澄は恩師とともに生活をしながらか漢学、漢詩を習う。後に「予（私）の学術文章のいまだ多く、人後に落ちざらしむるは、実に先生の賜なり」と述べている。そのため仏山は師匠というだけでなく、慈父のような存在であるとも語っている。

謙澄が最後に仏山に会ったのは、明治10年の秋、西南戦争に従軍しての帰りに故郷に立ち寄り、水哉園を訪れた時だった。仏山は大喜びで迎えてくれたが、髪や鬢には白いものが目立ち、顔色も蒼くて衰えを感じさせていた。別れるに及んで、仏山は謙澄の手をかたく握り、はらはらと涙を流して、いつまでも見送っていたという。

焼。一家離散の災難にあった。仏山は幼い謙澄を不憫に思い、水哉園に引きとった。動乱のため他の塾生達が帰省した

村上仏山は、「謙遜の人、恭謙、人情に厚い人」といわれている。弟子達に対して「貴君」と丁寧な言葉で呼んでいた。謙澄には「線松君」あるいは「謙一郎君」と呼んでいたであろう。仏山は自ら行いを正し、門弟達にその範を示した。謙澄も師から温かな愛情と薫陶を受け、他人の気持ちがわかる情に厚い人物となった。教育の力はこのように大きい。（文化人末松謙澄を考える会 城戸淳一）

水哉園と周辺を描いた『詩人郵図』

